

受賞紹介 20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化

著者	金 愛蘭
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	3
号	3
ページ	190-192
発行年	2013-03
URL	http://doi.org/10.15084/00000721

「公益信託田島毓堂語彙研究基金」では、語彙研究分野で刊行された論文の中から特に優秀な論文に対し、「学術賞（田島毓堂賞）」を授与しており、金氏は平成24年度の「学術賞（田島毓堂賞）」を受賞しました。

受賞論文 金愛蘭（2011）「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」
『阪大日本語研究』別冊3、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。

20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化

金 愛蘭

今回、賞を頂くことになった拙著『20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』は、2009年に大阪大学に提出した博士論文を、2011年に同大学大学院文学研究科日本語学講座の機関誌『阪大日本語研究』の別冊モノグラフとして、全文刊行させていただいたものである。

以下、その概要を示す。

従来の外来語研究は、外国語から外来語になっていく過程、つまり借用の局面に注目しているものが多いが、本研究は、日本語語彙の周辺部で揺れ動くとされる外来語ではなく、語彙の中心部に移行して基本語彙の仲間入りをしていく外来語、とその現象に注目している。

具体的には、20世紀後半の新聞記事を資料として「抽象的な意味を表す外来語の基本語化」現象の実態を記述し、日本語の語彙に、抽象的な外来語の基本語化という現象が、和語や漢語の類義語があるにもかかわらず、なぜ生じたのか、を明らかにすることを目的として、以下のことを行なった。

- (1) 大規模な「通時的新聞コーパス」の作成
- (2) 基本語化した外来語の抽出
- (3) 個別の外来語についての、基本語化の過程の記述
- (4) 抽象的な外来語の基本語化にみられる類型や要因の発見・検証

(1) については、『毎日新聞縮刷版』と『CD-毎日新聞データ集』を利用して、1950年から2000年までほぼ10年おきに、それぞれ毎月2日分（5日と25日）、各年24日分の朝刊全紙面の記事を収めた、20世紀後半の通時的な新聞コーパスを作成した。その規模は、全体で1,000万字を超え、紙面の少なかった1950年を除けば、各年平均200万字を超えるものとなり、20世紀後半の通時的な新聞コーパスとしては、類例のない大規模なコーパスとなった。

(2) については、この通時的新聞コーパスについて、形態素解析プログラムによる簡易な語彙調査を行ない、20世紀後半の新聞で外来語が増加していく傾向を確認するとともに、すべての外来語についてその「増加傾向係数」を算出し、使用頻度が高く、かつ、顕著な増加傾向をみせる外来語、すなわち、20世紀後半の新聞において基本語化した可能性の高い(抽象的な)外来語を取り出した。

(3) については、「トラブル」と「ケース」に注目し、それぞれの基本語化の過程を明らかにした。

「トラブル」については、1960年ごろから新聞に使われ始め、1980年ごろまでにはその意味・用法を3種6類にまで拡大させて、最終的には、新聞で報道される機会の多い《深刻・決定的な危機的事態に至る可能性を持って顕在化した不正常な事態》を「広く」「概略的に」表すことのできる、それまでの新聞語彙にはなかった「便利」な単語として成立したことを明らかにした。そして、そうした基本語がそれまでの和語・漢語の類義語とは別に必要とされた背景に、20世紀後半における新聞文章の概略的な文体への変化があることを示した。さらに、〈ヒトとヒトとのトラブル〉の意味に限って、「トラブル」とその類義語の使用頻度を調査し、類義語の使用の合計は、「トラブル」の使用が増加するのに反比例して、明らかに減っていること、〈ヒトとヒトとのトラブル〉の内容をより具体的に表す類義語の多くが、明らかに減っていることなどを確認し、それらを、日本の新聞文章がより概略的な文体に変化し、より広い意味を表す基本語を必要としていることの反映であると考えた。

また、形式名詞的な「ケース」については、20世紀末の新聞文章において、叙述文が表現する内容を客観的な事柄(コト)としてとらえた連体節内の被修飾名詞、つまり連体修飾節構造における客観的同格連体名詞(奥津敬一郎1974『生成日本文法論一名詞句の構造一』、寺村秀夫氏の「内容節」に当たる)という形式(用法)において最も多用されていることがわかった。より具体的には、《(すでに起こった)良くないコトガラ(=ケース)が〈多い/ある〉》という表現に、類義語である「事例」「例」「場合」よりも明らかに多く用いられている、ということを見出した。上記表現は、新聞において報道される機会がきわめて多いものであり、「ケース」が現在の新聞文章で基本語たりえているのは、こうした表現に用いられる語として、類義の3語よりも積極的にはたらいっているからだという見方を提示した。また、「ケース」およびその類義語について通時的な調査を行ない、「ケース」が、「場合」「事例」に対してはそれにとってかわるように基本語化し、「例」に対してはそれと役割分担するように基本語化していること、とくに、「ケース」が連体修飾節構造の被修飾名詞(同格名詞)としての用法を大きく増やしていることを明らかにした。

(4) については、(2)で取り出したいくつかの外来語について、通時的新聞コーパスを用いて、それぞれの類義語との量的な関係の推移を概観し、類義語を上回ってそれにとってかわる基本語化と、類義語に近づいて役割分担し共存する基本語化の、二つの類型を見出した。また、(3)における「トラブル」と「ケース」の基本語化についても、「トラブル」が前者の類型、「ケース」が後者の類型であることを明らかにした。

●参照文献●

金愛蘭(2006a)「外来語「トラブル」の基本語化—20世紀後半の新聞記事における—」『日本語の研究』2(2): 18-33.

金愛蘭(2006b)「新聞の基本外来語「ケース」の意味・用法—類義語「事例」「例」「場合」との比較—」『計量国語学』25(5): 215-236.

金愛蘭(2012)「外来語の基本語化」陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫(編)『外来語研究の新展開』29-45. 東京:おうふう.

金 愛蘭 (KIM Eran)

早稲田大学日本語教育研究センター常勤インストラクター。博士(文学)(大阪大学)。国立国語研究所特別奨励研究員等を経て、2012年4月より現職。

2009年10月より国立国語研究所時空間変異研究系プロジェクト非常勤研究員。

主な著書・論文:上記の【受賞論文】および【参照文献】のとおり。

受賞:第3回博報「ことばと教育」研究助成・優秀賞(現・児童教育実践についての研究助成事業,財団法人博報児童教育振興会,2009)。

社会活動:計量国語学会理事兼編集委員。